

## 第2回 学識者懇談会 議事録

平成19年6月18日 15:30-17:30

ハイアット・リージェンシー・福岡

2階 リージェンシー

事務局：開会。定刻となりましたので始めさせていただきます。本日はお忙しい中ご出席ありがとうございました。会議内容等は公開です。記者も参加しています。資料に落丁等ございましたらお申し付けください。委員各名紹介。尾家委員、小川雄平委員は欠席です。検討小委員会より井上座長、外井座長、佐藤委員もご列席です。そのほかは参加者名簿で紹介に代えますのでご了解願います。ここから矢田委員長に進行をお願いします。

### 第1回学識者懇談会・検討小委員会座長会議の主な意見について

#### 各検討小委員会における検討状況等について

矢田：ほぼ4ヶ月ぶりに開催される中間的な会と考える。小委員会および事務局で相当議論や作業が進んだと思う。7月に全国計画が公表され閣議決定後、協議会が設置されれば1年で広域計画は策定せねばならず、事前にプレ協議会として組織され検討が進められている。学識者の意見陳述は法律で決められており、本会で大局的な議論を行うもの。議事が3つ、報告が一つ。議題の1および2に重点を置いて進めていきたい。一括して説明をお願いします。

事務局：まず資料1についてご説明します。議事録について整理まとめたものです。第1回学識懇談会では大きく2つについて議論いただいた。一つ目の会議の運営については、キックオフレポートにおいては、九州オリジナルを追求するため全国計画との違いが大事であること。また、学識者懇談会の委員も各小委員会にオブザーバーとして入っていただき参加していただくようお願いしたところ。二つ目の議論の展開について、全国計画では新たな公が打ち出され、九州での計画においても重視すべきでないかという指摘があった。また、議論をアジアのみに限定しているわけではないことの確認をした。その他、歴史、文化、景観、環境問題を東アジアとの関係で捉えていくなどを打ち出すべきことの確認をした。さらに、地域の計画を作成することから住民の意見も反映すべきとの意見については、既に広域地方計画のホームページを作成し、議事を公表したり、「計画づくりご意見箱」を開設した。テーマ設定について、具体的な地域を設定しその地域に関してイメージをとりまとめてみたらというご提案、九州全域をみた問題提起も必要、などの意見をたまわった。

以上、第1回会議のご意見を踏まえ、本日の中心の討議課題である検討小委員会における検討状況に移ります。資料2の1ですが、今まで9回ほどの会を進めてきた。検討の状況ですが、プレ協議会では、422の論点を抽出し、その中から検討の過程で小委員

会ごとに論点を集約していった。参考資料 2 を参照されたい。各小委員会における検討の結果を合わせたものが、本懇談会で討議すべきキックオフレポートの骨子の構成案とあります。これは、第 2 回の検討小委員会において論点を整理していく過程で見えてきた方向性です。まだ具体的な文章にはなっていないがこのような枝振りでもとめていけるのではないかと考えます。今後の会議開催予定。国土形成計画法第三条の理念に沿った形で、各検討小委員会に議論いただいている。

本会議では、各検討小委員会における検討状況についての報告に基づいて補足事項をご指摘いただきたい。また、これからの九州圏のイメージについて、委員の方のお考えなどをご提言いただき、また、キックオフレポートの作成に関する部分についてご討議いただきたい。

各検討小委員会の検討状況に移ります。生活の安全と豊かな環境を目指す検討小委員会における検討状況です。ここでは、ソフト対策や九州の美しさについて議論が進んできました。このような内容に、プレ協議会で新たな制度として導入した、ゲストスピーカーからの提言も合わせて検討をしています。ゲストスピーカーの島根県中山間地域研究センターの笠松氏より自給圏域の形成という概念の提案があり、これも踏まえた議論の内容として、地域の防災の次世代の担い手を繋げていくためには、若い層の育成が大事であり、その前に、行政における正確な情報把握、適切な情報提供が大切であること、減災の観点だけではなく復旧の観点や国境部における漂着物の課題もあること、また、環境・安全に対する意識について、積極的な方とそうでない方とで二分極化がすすんでいるとの意見があった。そういうものを通して見えてくるこれからの九州像とは、地域を担う人間が継続的に確保され、安全で安心な地域が形成されるべきということであった。これまでは主に農山村中心に議論を進めているが、都市部にも拡大するべきとの意見が出されています。

次に自立的発展を目指す検討小委員会については、論点の 2 と 4 について進めていきました。論点の 8 は次回に持ち越しになっています。論点の 2 は地域の資源の発掘と再評価により磨きをかけることにより自立を高めていくこと。美しく暮らしやすい農山村の展開が必要であるとの観点から議論が深まっています。また、ゲストスピーカーの松下生活研究所の松下代表から事例を元にソーシャルキャピタルの重要性が指摘され、これを参考し、地域づくりに関して、いかに地域にお金を残していくかについて、さらには個別産業論から複合的な生活産業論を展開していくべきだとの議論があった。なお、参考資料にもあるが、九州の自立度というものを各種の指標で表現した。

次に活力ある経済社会を目指す検討小委員会における検討状況についてです。九州圏は東アジアや中国に近く、地理的に優位なポジションにあることを活かした発展について議論しました。論点として、今までの産業集積を生かし、いかに九州の活力を高めていくかや、新しい産業を核としていかにそれを高めていくか、また県内の各地域における核となる産業をいかに発展させていくか。次回はそれらを支える人材について議論する予定。将来イメージとして、アジアとの地理的近接性を活かした産業振興がますます重要であると

ということ、環境、バイオ、情報等を生かして、国際競争力を高めていく流れが今後強化されていくのではないかとことです。最後に、3つの小委員会の議論の方向性を見ていくと、今後変化していくこともあるが、九州の将来イメージとして、東アジアの成長と連携した自立的発展、自然と共生して美しく暮らす、多様で厚みのある九州圏を目指していくということがあげられるのではないかと思います。報告は以上です。

矢田：3つの委員会がそれぞれ論点を持ち出して、各論点を深めていくという手順を行っており、まだ2回しか議論されておらず論点の深堀の段階のため、全体の議論には届かない。これまでに全体の3割程度の論点について議論をしてきた。とくに議論をしたところについて討議してもらいたい。全体を通してお願いします。

小川：自立的発展を目指す検討小委員会に参加させていただいております。小委員会では多面的な論議が出るので、交通整理の意味も含めて、産業面において農林水産業が課題になっているが、活力小委員会との関係もあるのであまりこの委員会では深入りしない为好いとアドバイスした。昔は、ヒンターランドが都市を支援する仕組みであったが、これから周辺はそのような力を失っていく。逆に都市が周辺地域の支援機能を果たす時代となる。福祉や医療というものを産業として捉えるなら、周辺地域は自給できない。中枢都市で担うのか中核都市で担うのか、そのあたりを活力小委員会でも考えて欲しい。自立小委員会で対象としているのは農山漁村と中小都市である。今後重要なのは、集落や地域の再編という問題で、たとえば住民が災害弱者になるということが重要な問題。これは安全小委員会と絡む。これら自立委員会の積み残した論点については、他の委員会と関係あるものが多い。

樗木：各委員会で今後の見通しが難しい中で検討しているようだが、共通して出ているのが産業面、社会面において循環型社会の構築という点と印象を受けた。人口問題研究所の公表に見るように、減少傾向は地域間格差が大き。廃村・廃集落という現実が拡大する。九州における地域間格差は拡大する。これからは田舎が都市を利用するという視点が大事、いわば交流社会だろう。田舎に居住しても都市の利便性をどのように活用できるのだろうかということ、ブロックの中心である都市と田舎において交流が活発になるような圏域の拡大が重要。情報社会の発展で、ヴァーチャルの世界が進展している。九州の何処に住んでいてもアジアの情報を活用できるようなことが大事。都市が地方を支えるという視点と、地方が都市を利用するという双方向の視点が重要で、さらに深く掘り下げてもらいたい。

荒牧：有明海、水、中山間については、誰がマネージメントするかという議論は進んでいない。利害調整とは言わないが、調整するための仕組みが九州にはない。また、先ほどお話のあった九州圏の戦略の明確化というが、どこにどれだけの資本を投資するのかという

マネージメントする主体が明確になってない。言いつばなしではいけない。九州圏として観光も産業も横に連携するマネージャーは誰がやるのかははっきりしない。県知事会議でもよいが横に連携するきっかけが必要なのではないか。例としては、有明海だし、山林の保全も非常にお金がかかる。県に下ろすだけでは議論が進まないのではないか。

片岡：地域格差に関心がある。長崎県は離島ということもあり、コミュニティの崩壊が懸念されている。若い人たちが大都市に職場を求めており、これをふるさとに戻す方法が重要。地域資源を活用した観光やサービス業などの就業機会の増加が重要。そういう方策が提案されて良いと思う。地域をどう経営していくかという視点も重要。新たな公という視点も出ているが、人の問題が重要だと思う。連携のあり方も調整ではなく、一体化する連携が必要。

遠藤：森林政策が専門です。自立委員会について若干コメントします。グローバル化が進展するなかで、自立的発展は難しい点もある。国産材には追い風が吹き、やる気になっているが、小規模製材が脱落し、大型化する。5年後に九州で丸太の生産が75万立方の増加になると予想されている。25%の増加が見込まれており、担い手の問題が非常に重要。自立的発展は純血主義を前提にしているのでは？東アジアとの連携という側面では、林業ではアジアの研修生の活用を拡大すべき、期間延長すべきだとの議論がなされている。もしそうなったときに自立的発展として彼らをどう取り込んでいくのかについては大きな問題である。フラット化・グローバル化のなかで、日本だけが高賃金で森林管理を支えているというのは無理がある。外国人労働者を活用した展開を考えるべき。日中韓には森づくりという共通の課題を持っている。韓国でも間伐期に入っている。日本で研修し自国で役に立ててもらいたい。東アジアとの連携が可能ではないか。75万立米の純増について、顔の見える産業振興はきわめて総量としては小さいということ。住宅43万戸のうち大部分はハウズビルダーによる。自立の中核にこれを据えるというのは、方向性を見誤ると思う。

甲斐：安全小委員会については、災害に対する安全が主であったが、生活上の安全ということで、医療施設が都市と農村でどのように立地しているか。とくに産婦人科。利用可能圏域。生活における安全の格差が問題ではないかと思う。県域を越えた連携が重要。実際は県境がバリアになっている。これを取り払うべきという議論が必要だ。自立については、自立的発展について、全体的にスモールイズビューティフルになっている。アジアや豪州とのEPAが進んでおり、これは農林水産業においては九州の自立にマイナスになるはず。フィリピンとの人材のEPAはプラスになるはず。グローバリゼーションにおける論点はどうしたのかな？という感がある。活力についても同様で、九州内の循環ではなく、グローバルの産業連関や国際分業の話があってよい。

玉川：九州の地域構造が激しく変化している。中山間地の人口減や高齢化といった、地方部のこれから起こる困難さ、農漁業・暮らしそのものの放棄による荒廃。そのために再編が必要。九州全体の人口の動きを見ていると、福岡都市圏に年間4 - 5万人が集中している。人口集中が活力の元とされているが、実態としてはそうでなく、都市の貧困層が拡大している。単身生活者が43%と日本一の都市。大きな都市の中での暮らし、UR団地が一階部分を高齢者向けに建て替えているが、暮らしに視点を置いた都市のありようが検討されるべき。都市政策自体を厚くすべき。

西村：全体として初めて議論の内容を聞いた。全国計画に影響されすぎているのではないか。明確な計画論だが、場所の議論がない。例えば、九州新幹線や東九州自動車道、具体的な流域圏など、九州の構造を大きく変えたり、現在取り組みがあるものなどがある。国の計画も意識的に国土軸の議論は落としているが。場所の議論は後でやるのかも知れないが、今からリンクしておく必要があるのでは。アジアとの関係も計画論的になっている。国の計画では法務省の基本的なフレームから逃れられないから、アジア人材の話は言えなくなっている。しかし、九州でという計画なら言ってもよいのでは。国が足かせで言えないことを、人流の話として九州の視点でチャレンジしてみてもよいのでは。アジアの具体的な問題と関連して話をすべき。石川県知事との話で、コマツの好況の原因が、アジアはじめ世界同時好況と為替レートの円安が背景にあるとのこと。金沢の港湾の再整備のために県が200億ほどの大型の投資を行い企業誘致したとのこと。港湾施設と物流など、具体的なものを想定しながら計画論をしたらよい。もう1, 2歩、即地的な検討を望む。最後は、広域計画でできるものかわからないが、計画ができて実行する機関がないためこれまで計画にあまり実効性がなかった。計画は立てるが、実行する人がいない。しかし、九州はほぼ道州制と計画が同一の区分になる唯一の地域だろうと考えられ、計画と執行、執行管理について書ければ、九州の計画として非常にユニークなものとなるだろう。

矢田：整理すると、小川委員から出された都市と多自然地域の関係は新しい提案が必要だろうと思う。中小都市や集落などの結合のあり方をベースとして、基礎生活圏が生活レベルで医療、福祉、文化サービスなどで自立できるかどうか。もう一つの視点として、30万以上都市を中心とした生活圏域の自立。中枢・中核都市を中心とした高等教育、高度医療を軸とする圏域。そして、最後に九州全域の循環的構造。この三層の自立圏域ではそれぞれ自立の内容が違う。これを軸としたときに、中枢中核都市の成長管理はさほど難しくない。中小都市とそれをカバーする農村の崩壊は確実に予想できる。自然現象として見るのか、政策的に維持させるのかは難しい。足元が崩れていく九州を何とかせねばならないという視点は、九州の特徴として重要だろうと思う。崩れるスピードを緩和し、可能であれば再生する。一方都市の議論は確かにはっきりしていない。今後の課題だろう。その上

でさらに情報空間というものがどういう影響を及ぼすかということは新しい課題であり、たとえばどんな田舎でも e-コマースが可能という条件整備に関しても大きな論点。その上に、甲斐・遠藤先生の言う、グローバル化の影響を労働力問題であれ農産物問題であれ、きっちり考える。炭鉱の技術拠点とともに森林管理の技術拠点の形成へと政策の方向性が出せるのではないか。全国計画に影響を受けているという指摘は前からあって、課題別に書くのではなく、地域別に書くこともできる。また、荒牧・西村委員指摘の、誰がマネジメントするのかという議論について、トータルコーディネートする機関はない。県か支分局が執行するしかない。スコットランドの開発公社のようなものについて、指摘はできるが計画に書き込めるのかは難しい。道州制となれば解決するが、それまでの暫定的な措置など、きっちり議論した方がよい。見事に弱点をあぶり出していただきありがたい。

事務局：今回はご指摘を受けることを目的と考えていた。とくに都市問題については抜けていると感じていた。自立の検討小委員会で論点として挙がっているので今後小委員会で先生からの意見も賜りたいと思う。第1回懇談会で指摘を受け、地域をイメージしてのご指摘を受けながら、反映できなかった。難しい面もある。今日ご指摘のあったことについて、中山間地について議論が進みましたので、特に都市圏の問題について、ご指摘として受け止めて各小委員会へ作りこみのほうで参照させていただきます。また、ガバナンスについて九州圏は、道州制の圏域と合致はしているものの、ガバナンスが同一になってくるということを、事務局率先して示すというのは難しく、先生にご指摘いただきたいところです。

矢田：中間報告の割には議論が深まったかなと思っている。ガバナンスについては難しいが即地性については非常に重要である。書き方を即地的にするということも可能かと思っている。

計画策定に向けた委員の提言等について

事務局：資料3の計画策定に向けた委員の提言等についてです。まず、ゲストスピーカーという制度を設け、その提言については表にまとめたとおりであり、既にHPにて公開済みです。2つ目に各検討小委員会の委員に専門的見地から提言をお願いしています。原稿依頼を6月20日で行っています。先生と題目の関係は資料の通り。学識者懇談会の先生方にも、提言内容があれば、7月中旬までに頂きたい。HPで公開し広く議論の用に供したい。

矢田：政策の中に取り入れるときは口頭の説明は前後関係が分からないので、書いていただくと参考にしやすい。前後関係で巧く話す人は多いが、書くと書く人の整理にもなる。学識者懇談会の委員からの提言の締め切りは7月16日にしましょう。

経済界からの提言について

事務局：九州経済連合会の方から、先般意見書が公表されましたので、ご説明いただきご議論いただきたいと思います。

坂梨：ご説明の機会を与えていただきありがとうございます。昨年11月、ブレ協議会に最初に参加したときには若干心配したが、本日の検討結果を見ると、我々が議論してきたことはすべて入っているという感じがする。そういう意味では、この意見書は部分的な議論といえる。しかし、これだけは重点的に地元経済界からの意見としてお伝えしたいという、少し具体的な話をさせていただきたい。21世紀の九州地域戦略というビジョンがすでに当会にはあり、これを踏まえて検討した。広域地方計画には選択と集中の視点が必要ではないかと考えている。九州のポテンシャルを概観したあと、それを踏まえて戦略の視点として、九州アジアゲートウェイ戦略、知の連携拠点創造戦略、低密度居住地域の圏土保全戦略の3つを挙げさせていただいた。最後にこれを具体化するための過渡的な制度として、包括的予算制度と地域開発公社の制度のように、省庁の縦割りにとらわれない地域政策を実施する主体として位置づけてはどうかと提案している。九州発展のポテンシャルと課題というのは、ご案内なので項目だけのご指摘とさせていただきたい。九州が将来目指す姿は、自律的経済圏を形成するとしてきた。意思決定機能として地方分権を担い得る機関としての姿である。経済界として一番伝えたいのは、グローバルスタンダードに適應したシームレスアジアを実現する環境整備をして欲しいということ。アジアとのゲートウェイということでの国際港湾、国際空港、これを繋ぐ循環型高速交通体系がシームレスに連携することが重要と考える。港湾についてはスーパー中枢港湾を前面に出している。それぞれ複数の港湾が連携して整備、運営していくことが京浜港や阪神港では行われている。リードタイムの削減や物流コストの削減において、国際競争力の強化が不可欠である。今後のアジアとの輸送ルートとしての日本海側の物流の重要性から、北部九州港湾は、第4のスーパー中枢港湾として、個別の港湾管理者でなく、行政の違いを乗り越えて博多・北九州・下関の三港で北部九州ポートオーソリティーのような一体的に管理運営する組織が必要ではないかと考える。京浜、阪神、伊勢湾はこのような形態で進められている。国際空港も挙げている。福岡空港PIで調査が進み、今夏ステップ3に移行すると考えられるが、国際空港としての機能強化が図れるような対応策が必要ではないかと提案している。それ以外の空港も国際路線の充実を図るべきと考える。これら国際港湾・空港を繋ぐ高速交通体系として、まず東九州道さらに横断道延岡線や有明海沿岸道路などの横の軸や地域の広域連携を進める道路、最後に九州と中国地域や四国といった地域ブロックをはさんだ連携として関門海峡道路、豊予海峡ルートも外せないのではないかと。三県架橋についても触れている。素材型産業を支える臨海工業地帯のリノベーションも大事ということを指摘している。農業関係についてはFTA、EPAが進む中で、守りだけでなく九州ブランドとして輸出を目指すべきとしている。知の連携拠点ということで、協議会に文科省が入らないため、文科

省関係のプロジェクトが出てこないのだが、学研都市のインフラや産学官連携の促進を進めてもらいたい。大九州大学は余計なお世話といわれるかも知れないが、少子化が進み大学の経営が苦しくなる中で、大学の競争力の向上と若者の定着のためにプラスではないか。域内の国立大学間では既に単位の互換等も検討されており、さらに進めてはどうかという提案である。環境エネルギーなど九州が協力できる部分でのアジアへの貢献が重要である。低密度居住については、情報通信基盤の重要性は委員会でも指摘されている通りであるが、実際に医療行為を行ったりする際には、規制緩和が必要。最初に触れた地域開発公社についてだが、イギリスで地方分権に重きが置かれるようになるなかで、政府が地域開発戦略を提出させたうえで、従前の11の縦割り補助金を包括的に下ろし、計画とその進捗管理および予算の配分を行う主体として機能している。今後の国土形成計画の執行および進捗管理の主体として、このような機関の検討も必要ではないかという提案をしている。

事務局：活力小委員会に主に対応するように思います。既存のストックを活用したプロジェクトが多いように思いますが、九州圏全体の活力を高める産業施策は何処に書いてあるのか教えてください。

坂梨：九州全体のビジョンづくりを行ったのではなく、九州の産業全体に関し、そこまで詰めた議論はしていない。現在ハイテク製造業の集積が進んでいるとか、新産業の萌芽がみられるといった指摘にとどまっている。ネックになるのは九州の物流コストをいかに下げるかということ。渋滞でいつ届くか分からない、となるとジャスト・イン・タイムが実現できない。産業関連社会資本としては、定時性ある産業インフラとしての道路整備、とくに港湾や空港とのアクセスが重要と思っている。さらに、グローバルスタンダードに適応したシームレスな物流のための隘路の解決が必要であると考えている。

事務局：第三回の活力小委員会で委員に紹介したい。次にシンポジウムについて説明します。数回行ってきたシンポジウムであるが、北部九州に議論が偏りがちであったこともあり、早いうちに南九州での開催を計画したものです。7月6日に予定しているので、ご関係の皆様にご参加をお願いします。

事務局：閉会に際して、上村より挨拶がございます。

上村：大局に立った核心を突いたご指摘をありがとうございます。論点は出尽くしてきたかなという感がある。将来像もだいぶ見えてきた。問題はこれからだろうと思っている。計画である以上、どうすれば実現できるか、何ができるのかということを書いていかなければならない。これから即地性をもったプロジェクトを行っていかねばならない。地域性・独自性が問われており、九州圏特有の課題にどう答えるかと、全国共通の課題に九州の独



自の回答がどう描けるか、という2つがある。両者とも非常に難しい。ご指摘のあったガバナンスやマネジメントという問題はあり、道州制は10年ほど先の決着が予想される。本計画は10年後を見据えており、それまでの計画という難しさがある。計画として作りっぱなしでなく、フォローし、評価するマネジメントの仕組みが必要だろうと思う。一歩でもガバナンスやマネジメントへ踏み出せるか、委員の先生方から強い意見をお願いしたい。全国計画の閣議決定が遅れており、キックオフレポート作成にも余裕が出ているので、さらに議論を進めていただきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。